

特集論文

タブレット一人一台体制（GIGA スクール）での国語科授業の実践

Report on the practice of Japanese language lessons by One-to-One tablet device use (GIGA School)

森下 まちこ
MORISHITA Machiko
(教職大学院)

伊澤 真佐子
IZAWA Masako
(教職大学院)

宇治田 乃
UJITA Sono
(和歌山市立小倉小学校)

受理日 令和4年1月31日

抄録：令和3年4月からの1人1台端末の環境は従来の授業づくりに大きな変革をもたらした。この変革に対応した教育の質向上には、教師の学び続ける姿勢が大切である。本稿では、「言語活動を通して資質・能力の育成を目指す」という国語科の視点からいかにICTを手立てとして利活用すれば教育の質向上につながるのかを探った。小学校高学年の教材を取り上げ実践したところ、特に「自分の考えを深める場面」や「考えを表現・共有する場面」で有効性が見られた。

キーワード：GIGA スクール、ICT、ベストミックス、ICT活用指導力、タブレット、本質的な授業づくり、教育の質向上

1. はじめに

令和元年、文部科学省からGIGAスクール構想が打ち出された。そこでは、これまでの我が国の教育実践と最先端のICTのベストミックスにより、学習活動の一層の充実が図られ、主体的・対話的で深い学びにつながる授業の実現が可能となると述べられている。

山本(2020)が、「これまでの学校のICT環境はというと、数十台のコンピューターを整備し、児童が共用で利用していた。そのため、隣の学級や学年がコンピューターを利用していると、使えないことが多く見られた。」と記しているように、それまではコンピューター等を使いたいときに使えるとは限らなかった。

令和3年4月からの1人1台端末の環境は、児童がいつでも使えるようになり、一斉学習、個別学習、協働学習各々において従来では難しかった児童一人一人の反応を踏まえた双方向型の授業(教師対児童、児童同士)が可能となった。瞬時に各自の考えが画面上に反映されたり、それらを児童同士で共有したりすることが可能となるICTの特性を踏まえた利活用の工夫により、これまでにはできなかったことが効果的に実現できるようになったとも言える。

4月からのGIGAスクール導入において、実際のタブレット一人一台体制での授業の効果を各教育現場にて聞き取りを行ったところ、以下の2点が共通して確認できた。1つ目は、調べ学習がしやすくなったこと、

2つ目は、意見の交流・共有がスムーズにできるようになったことである。この2点は、ICTを用いた授業として、有効性を見出しやすい事項であると考えられる。

2. 教師に求められるICT活用指導力等の向上

教育の質向上には、教師の学び続ける姿勢が大切である。

このことが本質的な授業をつくることになり、児童への手ごたえを感じることで魅力ある教職につながると考える。教科の本質的な授業づくりに手立てとしてICTを利活用するには、教師のICTへの知識や技能だけではなく、その教科の見方・考え方、育成すべき資質・能力についての理解が必要となる。

『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』(答申)にも、(2)教職員の姿として、「教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け(略)」とある。研修を探して受講したり、本を読んだりして得たことを自分の学級の実態に合わせて取り入れていくことが大切である。

今回の学習指導要領において、初めて「情報活用能力」を学習の基盤となる資質・能力として位置づけて

いる。そして、教科等横断的にその育成を図ることが示されている。

魅力ある教職をめざすためには、目の前の子どもたちが生きていく次の時代のことを考え、新たなニーズに対して学び続けなければならない。ICT 活用についても、このことは当てはまる。

但し、「GIGA スクール」による一人一台体制でタブレット端末を用いる授業においては、教科で育てなければならない資質・能力よりも、ICT を使うことが目的になってしまっているのではないかと疑問を感じる場面が見られることは確かである。

そこで、「言語活動を通して資質・能力の育成を目指す」という国語科の本質的な授業づくりに、ICT を目的ではなく、手立てとしていかに利活用すれば教育の質向上につながるのかを探っていきたい。

3. 提案事例 領域：「話すこと・聞くこと」

まず、小学校5年生の国語科 対話の練習「どちらを選びますか」（光村図書）において、「課題や目的に応じて、インターネット等を用い、様々な情報を主体的に収集、整理・分析すること」を重点指導事項とした提案事例について述べる。

この教材は、家でペットを飼うことにした校長先生役が司会となり、犬をすすめるチームと猫をすすめるチームに分かれて意見を述べ合い、質疑応答をふまえて考えを整理したうえでどちらの意見に説得力があったかを司会者が判定するという教材である。犬や猫を飼うよさ、大変さについては、児童の生活環境や経験知からある程度の意見は言えるが、視点の広がりがないか見えない。加えて、この教材のおもしろさは、司会役を務める校長先生役に説得力のある意見を述べる必要があるという点にある。

先の OECD 生徒の学習到達度調査（2018）で、日本の生徒の正答率が低い問題の一例に「必要な情報がどの Web サイトに記載されているか推測し探し出す」がある。そこで、必要な情報を探し出す力をつけるために、犬または猫をすすめる根拠を探し出し、選ぶための活動を2つ入れる。

3.1 授業デザイン

①インターネットから情報を選ぶ

1人1台端末を活用し、犬・猫それぞれのペット情報を収集する。具体的活動として、インターネットで検索すると様々な情報を手に入れることができる。例えば、

猫について

- 散歩をさせなくても自由に動き回れる。
- 世話が簡単で、費用があまりかからない。
- 犬より長生きする。

- AB 型の飼い主が多い。

犬について

- しつけが比較的簡単
- 知らない人が来たら吠えるので番犬になる。
- 盲導犬として活躍している。
- A・O型の社交的な人に飼い主が多い。

これらの情報をもとに、次に必要となるのが飼い主である校長先生の情報である。

②インタビューによる情報収集

次に、飼い主となる校長先生本人にインタビューをし、自身に関わる情報を収集する。具体的活動としては、下記のような質問をするが、校長先生へのインタビューの内容についてはペットに関する直接的な質問はしないこととする。

- 血液型は何ですか。
- 散歩はよくしますか。
- 自身の性格は。 など

③上記①②で得た情報を根拠にして、意見を述べ合う。

3.2 考察—より深い思考に結びつく学習者用端末利用—

情報収集に関しては、すぐに学習者用端末を使うのではない。まず、図書館で動物図鑑を読んだり、実際にペットとして飼っている大人や友達へ聞き取りをしたりすることから始める。それに加えて①の活動することにより、幅広い視点からの情報が得られる。

そして、②の活動を入れ、飼い主となる校長先生の人柄や性格などの情報を直接本人から収集する。

以上のような学習者用端末利用による情報の収集と、直接的な対人へのインタビューの内容から論理的思考をめぐらせ、対話の時間に入るという学習計画である。

この計画における学習者用端末使用の利点は、

- 個の興味関心に応じて、いつでもすぐに調べられること
 - 調べた結果をすぐに編集できること
- の2つが挙げられる。

当授業では、情報収集の目的が明確であり、児童自らが説得のための根拠となる情報を欲するところから始まる。そして、多様な情報手段（図書、インターネット、インタビュー等）を用いて主体的に調べ、対話のための提案資料としてまとめることができる。よって、それぞれの学習場面にて、収集・編集した情報の必要感、提案資料として効果があるかどうかといった切実感などをもって、学びが構築できるものと考えられる。

冒頭に述べたように、児童らの ICT 活用の有効性としては、「調べ学習がしやすくなったこと」と「意見

の交流・共有がスムーズにできるようになった」が聞き取りによって明らかになっている。よって、当提案事例は、これらの ICT の有効性を児童らにも、指導者にも実感できるのではないかと考えられる。これによって、指導者は、国語科の学びにつなげる学習者用端末の更なる有効利用について見出していけるのではないだろうか。

4. 実践事例 領域：「読むこと」

小学校 6 年生の国語科「海のいのち」立松和平作（東京書籍）について、「精査・解釈」「考えの形成」を重点指導事項とした実践事例について述べる。

ここでは、第 3 筆者の宇治田乃教諭（以下授業者）が、A 小学校の担任している 6 年生の学級で 10 月に実践した指導事例を取り上げる。授業者は、国語科の研究会に入り学び続けており、昨年からは教職大学院生として ICT の活用についても研究している。

実践に際し、水戸部（2021）の著書を参考にした。この著書は「言語活動を通して資質・能力の育成を目指す」という国語科の本質的な授業づくりに生かすことができるよう、ICT を活用する具体的な場面を多彩に提示している。

過去において「海のいのち」の実践事例は多くでているが、学習者用端末をどう使うかの発想は出てこない。1 人 1 台端末を使うことと国語科のねらいを達成させる授業の在り方についての両方が出てくるのがこの著書である。

本授業では、この著書の実践事例を参考にし、どのように学習者用端末を使うとねらいとする学びの実現に結びつけられるかを検証することにした。

4. 1 「考えの形成」の重視

平成 29 年告示の学習指導要領では、「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、「考えの形成」に関する指導事項が位置付けられた。

教材「海のいのち」は「C 読むこと」の領域である。「読むこと」における「考えの形成」では、文章の構造と内容を捉え、「精査・解釈」することを通して理解したことに基づいて、自分の既存の知識や様々な体験と結び付けて感想をもったり考えをまとめたりしていくことが大切である。

そこで、「海のいのち」において、「精査・解釈」「考えの形成」を重点指導事項とし、ICT（学習者用端末）を「考えを形成」するための手立てとして利活用することにした。

そして、特に「思考力、判断力、表現力等」「考えの形成」「C 読むこと」の「エ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること」「オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自

分の考えをまとめること」を重点的に扱うという単元構想を組んだ。

4. 2 研究の視点

国語科の本質的な授業づくりに、ICT を手立てとして利活用していくための視点として、「国語科の指導における ICT の活用について」（文部科学省）の「考えられる ICT 活用場面」と照らしあわせて考えながら実践することにした。ここでは、①「情報を収集して整理する場面」②「自分の考えを深める場面」③「考えたことを表現・共有する場面」④「知識・技能の習得を図る場面」⑤「学習の見通しをもったり、学習した内容を蓄積したりする場面」（番号筆者）の 5 つをあげている。本稿では、②「自分の考えを深める場面」を中心に授業を構成し、③「考えたことを表現・共有する場面」や⑤「学習の見通しをもったり、学習した内容を蓄積したりする場面」についても検証することとした。

4. 3 4 月からの取組による児童の実態

授業者は、新学期から学習者用端末 Chromebook を授業に有効に活用しようと大学や教育委員会主催の研究会で研修を積んできた。担任をしている 6 年生の学級においては、4 月から計画的に端末利用の技術を教え、様々な教科に積極的に取り入れている。児童は、調べたりまとめたり意見を共有したりするのに 1 人 1 台端末を活用しており、操作にはずいぶん慣れてきている。1 学期から付箋機能を使っただけのグループでの話し合いや共有画面を利用した意見交流も何回か行った。さらに、「好きな動物」スライド作りを帯の時間ですることになり、代表の児童が休憩時間に方法を覚え、全体に広めた。この時、授業者は児童用のマニュアルを作り配布している。2 学期には外国語の時間に外国の様子を調べてスライドにまとめたり、修学旅行で行く所のスライドを作ったりもしている。これらの経験により、技術的にも教科のねらいにそった端末が使えるようになってきている。

そこで、「海のいのち」の単元においても、Chromebook を使い、質の高い言語活動ができないかを考えた。

スライドを利用し、太一の生き方についての自分の考えを 1 枚のスライドにまとめるのである。

それには、「精査・解釈」「考えの形成」の授業をしっかり行うことが必要である。この実践では、課題づくりとまとめで全員に端末を使うようにしているが、単元計画 9 時間の全てに端末を使う指示はしていない。作者に興味をもったり、登場人物や背景に興味をもったりしたときに随時調べるように指示をしている。

4.4 1人1台端末を活用した授業デザイン
「太一はこんな人」 太一の生き方にせまる
(R3.10.1～R3.10.15)

授業者の学級では、授業中、Chromebookは、いつも机の上に置き使いたいときに使えるようにしている。

以下は、1時間ごとの授業実践から国語科における学びとICT活用の記録である。

(1) Jamboardを利用して学習課題を設定する

物語を読んで、これから考えていきたいことを各自が書き込み、黄色の付箋で出した。以下が、個人から出された付箋である。これを各自の端末に送り、意見の交流を行った。手元にあるので集中して友達の見聞を見ることが出来る。



図1 最初に出された課題

これらの出てきた課題をこれからの学習計画を立てるために分類することになった。

一人一人、どのように分類して考えていくかを学習者用端末のスライドで、動かしながら考えた。図2～4は、その時の画面である。

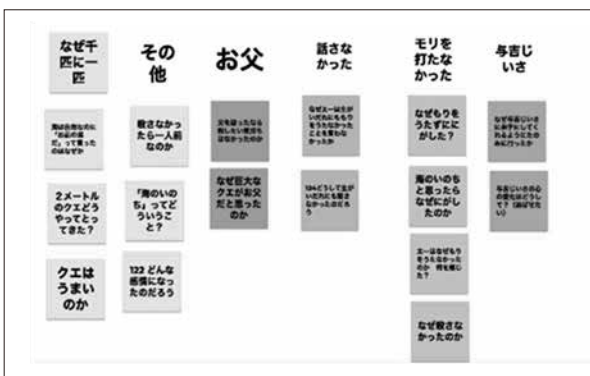


図2 主な登場人物、太一の言動により分けた図

このように、主人公である太一や太一の言動、父、与吉いさの三人に分ける児童が多かった。図2のように付箋の色を変え、一列に並べて見やすくしている。

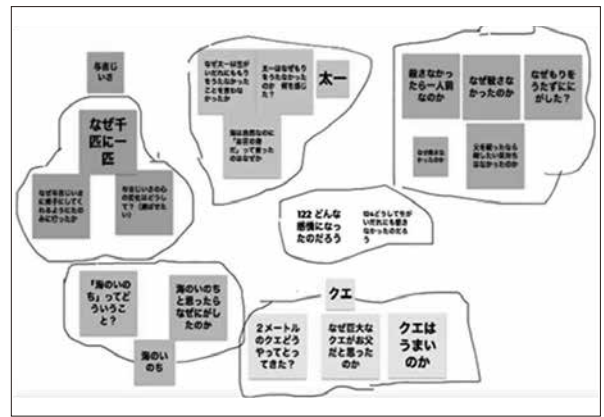


図3 ○で囲んで分類した図

「海のいのち」という題名、「クエを殺さなかったことについて」「太一の感情」などの視点でも分類し、それぞれを付箋の色を変えた上で囲んで考えている。

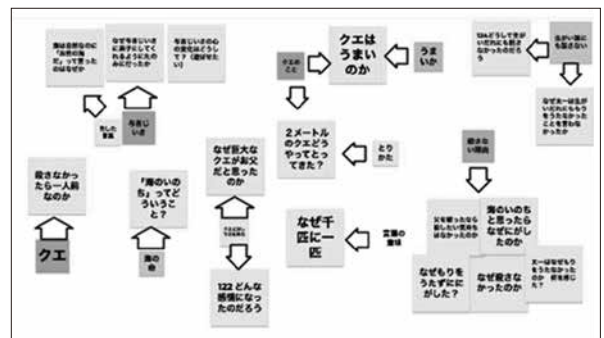


図4 矢印で関係を示す図

この児童は、矢印で因果関係を表そうとしている。付箋の色は黄色のまま、テーマのところの色を変えて分かりやすくしている。

このように、学習者用端末のスライド上では、それぞれの付箋を動かしやすいので、自分が考えたように分類しやすく、色も変えられるので視覚的な要素も加わり作業しやすい。修正もしやすく、自分で課題を増やすこともできるので、どの児童も意欲的に分類しようとしていた。

その後、各自が自分で分類した画面を共有画面で示しながら、説明した。それを聞きながら、学級で学習計画を立て、スライドの2枚目に載せた。

また、Jamboardに本文の画像を送り、書き込みや付箋を貼れるようにした。

(2) 人物の生き方について考えよう みんなの疑問から (スライド2枚目)

- ①クエ
- ②与吉おじさん
- ③太一
- ④題名「海のいのち」

1時間目の話し合いで、単元のゴールに「太一はこんな人—太一の生き方にせまる—」となった。そこで、上のような大まかな学習計画を立て、それぞれについても、1時間目の付箋で送られた意見をもとに、児童が付箋で提出した学習課題から計画を立て、スライドで本時の課題を示しながら授業を進めた。

(3) クエ

(課題提示のスライド③)

- おいしいのか
- 2メートルもあるものをどうやってとるのか

物語の背景を知り、内容に深くかかわる入り口とした。クエについては、各自が学習者用端末で写真を見たり、説明を読んで知りたいことを調べたりしていた。児童は、教科書の叙述と照らし合わせたり、調べて分かったことを教え合ったりしながら、太一の父のことも考えていった。クエに対する太一の思いについても考え始めた。

(4) 与吉じいさ

(課題提示のスライド④)

- 太一はなぜ与吉じいさに弟子にしてくれるようにたのみに行ったのか。
- 与吉じいさの心の変化「遊ばせたい」とは？
- 「千匹に一匹」なぜそう考えた？
- 「お前の海だ」と言ったのはなぜ？

太一の生き方に大きな影響を与えた与吉じいさ。与吉じいさの言葉の意味を考える事は、物語の主題にもつながる。

児童は、本文の画像に、書き込みをしたり、付箋を貼ったりしながら考えていった。

この時間は、ノートに「千匹に一匹」「与吉じいさに弟子入りしたのはなぜか？」について考え、書いた。以下ノートの記述である。

児童 A：お父の次にあこがれていた。本当はお父が良かったが亡くなったから、与吉じいさにした。改めて、父のかたきをとりたい！とかクエをうらんでいる気持ちからやと思う。

児童 B：尊敬しているから。与吉じいさに弟子入りすればいつか瀬の主を殺せると思った。

(5) 太一

(課題提示のスライド⑤)

1. なぜもりをうたなかつたのか？父を破ったなら殺したい気持ちはなかつたのか？

2. 殺さなかつたら一人前なのか？
3. なぜ巨大なクエがお父だと思ったのか？
4. 太一の感情、なぜ生がいこのことを言わなかつたのか？

太一の成長を捉える時間でもある。児童は、今までの時間で、学習者用端末に書き込んだり、ノートに読み取ったことを書いたりしている。この時間は、物語のクライマックスであり、じっくりと考えてほしい場面なので、ノートに課題4つに対して自分の考えを書いている。以下この時間のノートの記述である。

児童 A

1. 大魚は殺されたがっていると思って、こういう気持ちははじめてだったから。海のいのちと思ったから。
2. (空白)
3. お父と似ていて、おだやかな目でにげようとしないところが似ていたから。
4. 誰かを助けたとか言わない方がいいから。父も言わなかつたから。父の言うことをそのまま受けついで言わなかつた。

児童 B

1. クエに何かを感じた。お父だと思った。
2. 父を破っためずらしく強い魚。殺してはいけない気がした。
3. クエがお父だと思っていて他の人にとられたらもう会えなくなってしまう。
4. 太一は父を破ったクエを見つけても殺さなかつたから父の思いも瀬の主もすべて大切にできる人。

上記において A 児の2が空白になっている。1時間かけて話し合い、友達の意見も聞いて懸命に考える姿が見られたが納得する答えが見つからなかつたようである。問いが難しかったのかもしれない。

(6) 題名「海のいのち」

課題提示のスライド⑥

- 「海のいのち」ってどういうこと？
- 「海のいのち」と思ったら、なぜにがしたのか？

まず、「海のいのち」とはどういうことかについて話し合った。その時の授業記録を一部抜粋する。

- C 「ここは、お前の海だ」と与吉じいさに言われたから太一のこと。
- C 魚とかの海の生き物と、漁師のこと。
- C 海で生活している、海の命をいただいている人。
- C 「お父ここにおられましたか。」と書いているか

らお父。お父の姿を海の中に見たから、クエ=お父。

C 与吉じいさに「海にかえられましたか」と言っているから与吉じいさ。

これらの意見がでた後、次に題名に込められた作者の思いについて話し合った。

C 魚をたくさん獲りすぎないでほしい。

C 一匹一匹慎重に獲ってほしい。

C 「大魚は海のいのちと思えた」と書いてあるから、太一がクエを殺さなくて海のいのちはまだ残っているから。

などと意見が出されたものの、なかなか難しいようであった。

そこで、授業者が、「みんなの解釈はこういうことなんです。もっと深い解釈はありそうですか。グループで話し合ってみて。」とグループ活動を入れた。

作者が題名「海のいのち」に込めた思いについてのグループ活動の様子である。

グループ A：立松さんのことについてインターネットで調べ、「栃木県の人。栃木県って、海がないから海に行きたいと思って、漁師にあこがれていたんじゃないかな。だから海とか漁師の命を考えたのじゃないかな。」

グループ B：立松さんの命の本シリーズ「山のいのち」「街のいのち」「川のいのち」…のページをインターネットで調べ「立松さんは、いろいろな職業をもとに命の話を書いて、その大変さをみていきたいのかな。」

グループ C：今までの端末の学習の画面を出し、付箋で課題を出し合ったところを見たり、本文の画像の書き込みを見直したり、書き加えたりしながら話している。

このように、教材の文章を読み直したり既習を振り返ったりするだけでなく、手元の学習者用端末を使ってインターネットで情報も取り入れながら話し合っただけでなく、手元の学習者用端末を使ってインターネットで情報も取り入れながら話し合っただけでなく、手元の学習者用端末を使って考えを深めていた。グループでの話し合いをもとに、全体では、次のような意見が出された。

- 「いのち」に着目していて、海で働く人のいのちについて書いている。
- 「いのち」の中に、海の世界のことも考えている。
- 「山のいのち」とか「川のいのち」とかもそうなんだけど、みんなで一緒に生きているということ。

自分が授業の始めに考えていたことよりも深まったところを中心に個人でノートに振り返りを書いた。

児童 A

お父ここに…と思うことによって、瀬の主を殺さないですんだし、この大魚は海のいのちだと思えたから。太一の気持ちを变えたのが海のいのち=クエだから。漁師たちの命と千匹に一匹が同じ。海のいのちはクエだけじゃなくて、太一の父の、その父…もふくまれている。

児童 B

海のいのちは、海にいる生き物のこと。お父や与吉じいさもふくめて海のいのち。

この時間では、教師が指示しなくても、それぞれに自分が気になる場所を調べたり、前のスライドを見たりして、手元にある学習者用端末を必要に応じて使う児童の姿が見られた。

(7) 太一と太一の母

課題提示のスライド⑦

- 「太一は母の悲しみさえ背負う」とは
- 村一番の漁師とは

太一の母については、児童からは課題としてあがってこなかったが、大事な登場人物の一人であることから、授業者が学習課題を提示し、1時間追加することにした。「太一は母の悲しみさえも背負おうとしていた」について「悲しみさえも」について考える場面グループ学習を行った。A 班では、端末に取り込んだ3ページ分の教材の今までの書き込みを見ながら、話し合っていた。

A 班での話していた内容を一部抜粋する。

- C お父、与吉じいさ、太一の周りの人全員の悲しみとちがう？
- C いつか死んじゃうやん、悲しいけど。悲しくて、苦しくても立ち上がること。
- C でも、楽しいこともあって、悲しいことを少しと考えている。

このように、太一の気持ちをグループで話し合っていた。

そんな母も「おだやかで、満ち足りた美しい」と変わり、太一も変わったことに焦点が移っていった。

- T 太一は、クエを殺さなくて済んだけど、前と後でどのように変わったかな。
- C 屈強な漁師から村一番の漁師。
- T 屈強な漁師、一人前の漁師、という言葉もあったね。クエに会ったことを間に挟んで前は「一人前の漁師」、後は「村一番の漁師」、どう違うかグループで話し合ってみて。

と、ここでグループ活動を入れた。

グループの話し合いでは、インターネットで「一人前」という言葉を調べる姿や、付箋での書き込みを見直している姿が見られた。次の全体の話し合いを抜粋する。

- C 村一番は、村に一人だけ。一人前は、何人もおると違う？
 C 一人前は、ベテランで上手な漁師。
 C 一人前の漁師は、魚がたくさん獲れる、技術。村一番の漁師は、考え方。「千匹に一匹とか」
 C クエを殺したら一人前。クエを殺さなかったら村一番。
 T 考え方って言ってたね。クエを殺したか殺さなかったかは関係あるの？

ここで、机上の学習者用端末ではそれぞれの画面を見て考えていた。ある児童は、クエの画像を出して考えていた。ある児童は、一人前など語句を調べていた。また、ある児童は、教科書の書き込みをしたスライドを見ていた。ここで、Bグループが話し合いのときに図5のようにスライドをメモのように使っていたのでそれを教科ごとで作っている国語のclassroomのMeetで共有した。以下がその時の、授業記録である。

- T このスライドなんだけど、一人前は、そこでクエを殺すか殺さないかの判断をする人説明して。
 C 一人前というのは単なる大人の漁師。太一は誰かの思いを背負っているから殺さないって判断して村一番の漁師。
 C 魚の命を考えているから。
 T ここでも (⑥のスライド)、魚の命って、考えたよね。(⑥のスライドを出す)

このように、話し合いでスライドをメモのように使っていたので、全体にスライドを共有しながら進めることで、児童は、興味を持って友達の作ったスライドを見たり、話し合ったことを思い出したりして考えていた。



図5 Bグループの話し合いの様子

(8) スライド1枚に、人物についてまとめる

スライドの1枚目を表題「太一はこんな人」太一の

生き方にせまる』と教師が作り、出席番号順に個人のワークスペースを作っていた。

最初からゴールが示されていたので、背景には何をもってよいか、どんなことを書こうかについてはイメージできている児童が多かった。

(9) スライドの発表会 振り返り

国語のノートに、いい所をメモしながら一人ずつ発表していった。全員のスライドを見終わった後の授業記録である。

- T みんなの発表を聞いてどうでしたか？すごく上手にできていたね。
 C 色とか矢印とかを使って、よかった。
 C 文字の色を変えたり、図形をつかったりしてよかった。
 C 吹き出しも使っていてよかった。
 C スライドに書いていないことも発表できてよかった。

児童は、スライドに入れる絵や背景にもこだわり、視覚に訴える工夫もしていた。

そこで、授業者から、「使いこなせているね、字の大きさ、矢印、背景、技術はすごいよ、上手になっている。」とまず褒めた。さらに、物語の要約についても上手くまとめてスライドに載せていることを褒めた。そして、

「内容のことをもう少し書いてほしい。どの言葉から太一の生き方についてこう思ったって。太一の生き方で印象に残ったところを書いてね。そこから、太一のこと、こんな生き方をどう思うかを書いてほしい。太一についてどう思うかを知りたい。こんな太一の生き方について自分はどう思うのかをスライドに書き足してみて。」と児童に投げかけた。児童は、教師の意図を理解し、それぞれに集中して書き込み始めた。10分後、スライドに書き込んだことを発表した。

- C 太一は、お父を殺されてもクエを海のいのちだと思い、殺さなかった優しい人。
 C 太一は「自分の目標を決めて生きていた」だから、たまには後先考えず、前に進み続けてくれればいいなと思っています。
 C 自分のお父さんや弟子にしてもらった人をなくしても、立ち向かっていく太一がすごいと思った。
 C もしクエを殺したとしたら、次太一のような気持ちになるのは、クエだと思った。殺さない理由の一つかな。
 C 自分は大事な人とか死んだら自分は絶対に泣くから太一はすごいと思うし自分は人の悲しみを背負うっていうのはすごい難しいことだ

と思うから、太一はすごいと思います。

C クエに会っても殺さなかった判断は、漁師の人でも、魚の命のことを考えているのはすごいと思った。自分がこの立場だったら殺していた（クエを）から反対の判断。太一は、すごい我慢強いし、優しい人だと思いました。

このように、一枚スライドに授業者の言葉から自分の考えを付け加えることができていた。1枚のスライドにまとめるということは、拡大縮小機能で付け足しもしやすく、移動もできるのでレイアウトも変えやすい。児童が作ったスライドが図6である。このように、矢印を使うことで思考の流れも可視化できるので児童はまとめやすかったのではないか。背景も自分で好きな画像を選んでおり、意欲につながったように感じる。

また、その内容を見ると、話し合いで深めたところが反映されており、対面での会話による交流を大事にすることの必要性を感じる。

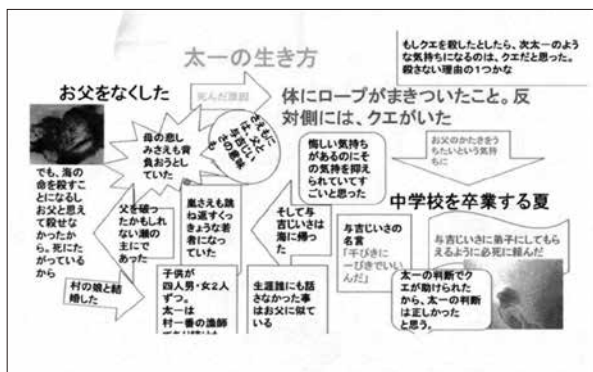


図6 児童の作ったスライド

4. 5 実践の成果と課題

4. 5. 1 児童の感想から

Jamboard を利用して学習課題を設定したり、スライドを利用して交流したりするなど1人1台端末の活用を単元構想に位置づけて行った。単元終了後、児童に端末を使った授業デザインの感想を聞いた。

- 楽しい。
- 頭に入ってきやすい。
- 本文に書き込みやすい。付箋機能を使ったり、書き込んだりできる。

などが出された。

以下、端末を使った授業の感想記述である。

児童C：太一の考えについてみんなと発表して深められました。たん末を使う授業の仕方はとてもいいと思う。理由は教科書の本文をたん末でやると大事なところや発表するときにやりやすいし、スライドでまとめるほうが画ぞうもかんたんに入られたり、字の色を変えたりといろんな工夫が

かんたんにできるからいいと思います。

児童D：私的にはみんなの考え、自分の考えは深まったと思いました。理由は、今日のスライドの発表内容を見ると楽しい。自分の考え（後からたしたやつなど）を見て、すぐに書けたからです。（略）たんまつだといつでも見返せて頭に入ってきたりやすかったです。このやり方をこれからもやりたいです。音読するときは教科書だけど、すぐにこんな考えが出てきたっていうときはたんまつかな、と思いました。

児童E：パソコンを使う授業の方が思ったことをすぐかけてちょっと楽しいし線も引きやすいのでこの授業のしかたがいいなと思いました。スライドも上手にできたかなと思いました。次は、短くまとめつつ分かりやすく伝えるようにしたいです。

このように、一枚スライドにまとめるのは、楽しいし、友達の作ったスライドを見るのも楽しいと感じている児童が多い。児童Aのように、色やレイアウトを工夫したり、気に入った画像を取り入れたりしながら自分の作ったスライドに満足する姿がうかがえる。児童Bからは、すぐに見たいところを見ることができる良さや、書き込みやすいという良さが挙げられている。さらに、教科書を使う良さや端末を使う良さを考えて、使い分けようとしている姿がうかがえる。児童Cからは、友達の発表を聞いて、短い言葉でまとめよう、分かりやすく伝えよう意識したことが感じられる。

また、使っていくうちに、最初と変わったという感想としては、このような記述があった。

児童F：最初は、スライドとかめんどくさいと思っていたけど、やってみると楽しくて、太一はどういう気持ちだったのかを想像した。でも私の想像をみんなはしていなかったしで、やってよかった。児童G：Jamboardの教科書よりも、普通の教科書の方がよかった。書き込めるのはめちゃくちゃいいけど、難しく何をかけばいいかわからなかった。スライドは今までの手で書いていたやつよりも、もくもくと進んだ。

児童Fのように、最初是否定的だった児童も、意見を共有しやすかったとしている。児童Eのように、普通の教科書中心の授業の方がいいとしながらも、作業のしやすさや集中しやすさを書いている児童もいた。

このように、ほとんどの児童が、スライドを作ったり見たりすることが楽しいと感じ、物語の読み取りを深めることができたと感じていた。

4. 5. 2 成果と課題

今回、協働的な学びを可能にするための、Google ス

ライドの活用をした。児童は、自分の端末で友達のスライドを見ることができるので、画面をしっかりと見て話を聞き、考える事ができた。また、すぐに調べられるので、作品や作者、作品の背景への興味や関心ももちやすかった。

授業者も、「授業するための端末利用を自然な形でできた。この学習では、ここで端末を使うと便利で効果的だからというところで使えた。しかし、それには、タイピングと慣れという素地が必要だとも感じた。次に表現したりまとめたりするときに、子どもからこの手段(スライド作成)でやりたいと言ってほしい。」と振り返っている。

ICT活用も含め、児童が自分で目的により説得力のある手段を選んでいくことが個別最適化にもつながると考える。

本実践を4.2で挙げた「国語科の指導におけるICTの活用について」(文部科学省)の「考えられるICT活用場面」と照らしあわせてみる。本稿の授業の中でも、これら5つの場面で端末を利活用していた。

特に、②「自分の考えを深める場面」のイメージ例にある3つを当てはめ効果を見ていく。

1つ目の「自分で考えたことを画面上の付箋に書き出し、その付箋を目的や意図に応じて分類する」では、自分の考えだけでなく友達の考えも付箋で取り込み、話し合っていきたい課題のまとまりに分類していた。自分たちで学習計画を立てることや学習のめあてを考えていくことに有効であったと考える。

2つ目は、「プレゼンテーションソフト上でスライドを並び替えるなどして、自分の伝えたいことがより明確に伝わるよう、目的や意図、相手に応じて用いる情報を取捨選択したり、話や文章の構成を考えたりする」である。この実践では、一枚のスライド上での言葉や文章、挿し絵や写真であったが、スライド上で自分の主人公に対する思いがクラスの皆に伝わるように工夫していた。また、物語の用紙をスライドに書き込んだ児童も多く、画面の背景や挿し絵など取捨選択する姿も見られ、国語科における表現にも有効であった。

3つ目は、「デジタル教科書上で自分が重要だと考えた箇所を線を引く、友達と比較するなどして、考え直した場合に線を引き直す」である。デジタル教科書ではなかったが、写真で本文の画像を取り込んでそこに線を引いたり書き込んだりした。グループや全体での話し合いのときに、端末のスライドを見ながら話をし、その後個人で書き込んだり、付箋を貼ったりして自分の考えを深めている姿が見られた。また、考え直したところを修正したり、付け加えたりした。

次に、③「考えたことを表現・共有する場面」では、「プレゼンテーションソフトを活用して発表資料を作成する」がある。これについては、児童の感想からも分かるように、自分の思いを表現することに意欲をも

ち楽しく作成していた。また、画面上の仕上がりがきれいなので満足していた。授業者が国語科としての力をつけることをしっかりと意識して進めていたので、作品のテーマや自分の読み取りについて深められたと感じる児童も多かった。

また、⑤「学習の見直しをもったり、学習した内容を蓄積したりする場面」では、「以降の学習における様々な学習活動において自分の必要に応じて適宜参照できるように、学習した内容を個人のフォルダに蓄積する」とあるが、これについても、本実践では児童が有効に利活用していた。学習の流れをスライドでしていたので、単元計画やその時間のめあてをすぐに確認することができた。

課題としては、2点ある。国語科の本質的授業づくりについて、1つは、学習者用端末を使った交流の仕方、もう1つは、ノートとの併用の方法である。

1つ目の交流については、学習者用端末で全員の考えを瞬時に知ることによる利点を活かすことで「共有」の質的向上を図ることができるのではないかということである。今回は、できなかったが、シートを見て、話をしたい人のところに行き、交流するといった活動も取り入れることができる。また、友達のスライドに書き加えることもできる。また、友達の考えに対してメッセージを書き込むなどよりコミュニケーションを深める学習者用端末の使い方もある。画面で友達の考えを知り、交流したい人と交流できるということを生かした活動を入れていきたい。

2つ目のノートとの併用については、「言語活動を通して資質・能力の育成を目指す」国語科では特に大切にしなければならない。まず、一人学びでノートに書いて考えさせたい。本実践でも「精査・解釈」では、課題を考えるのにノートを使っている。特に、ノートに詳細に記述させることで主題に迫っている。しっかりと読み取りさせたい場面ではノートへの記述の時間をとり自分の考えをもたせている。これが、最後のスライドにまとめることに活かされている。

今回の実践では、スライドを作って授業を終えたが、最後はノートに「太一の生き方」についての考えを書き、抽象化を図りたい。人との関わりの中で成長していく様子や、自然との共生など、主題に迫る時間をとりたかった。

4.6 教科横断による、学びの広がり

以上のように、国語科で、意見交流・共有ができるようになってきた。

これを道徳科の授業にも応用した事例を取り上げる。

道徳科の「地球を一周歩いた男—伊能忠敬—」(内容項目:真理の探究)と「ips細胞の向こうに」(内容項目:希望と勇気,努力と強い意志)でも、「海のいのち」

で学習したことを思い起こせるようにした。

ここでの学習者用端末利用は、テーマに対して根拠や原因を考えて整理するのに役立つ思考ツールを使った。グループでの話し合いを付箋機能を使い張り付けることにより行っている。

「地球を一周歩いた男—伊能忠敬—」では、下の図7のようになった。

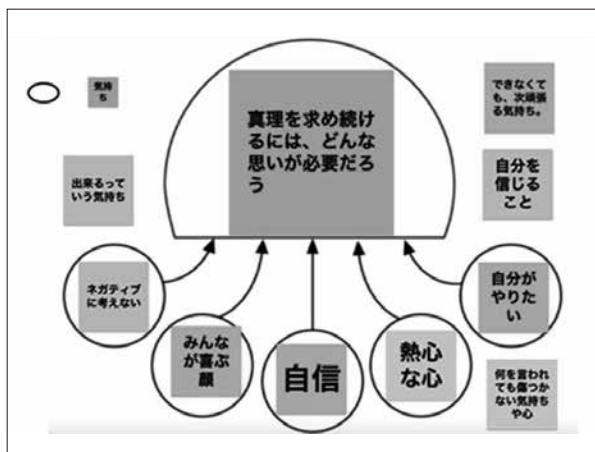


図7 「真理を求め続けるには、どんな思いが必要だろう」について、グループでの話し合い

振り返りでは、「伊能忠敬さんの生き方をどう思いますか。今回の学習を自分の生活にどう生かしますか?」と投げかけて考えさせた。児童の感想を以下に示す。

- 他のものに頼らず、「自分でやる」というのはいい考えだと思います。ぼくの将来の夢でも人の役に立ちたいと思います。

「ips 細胞の向こうに」では、下の図8のようになった。

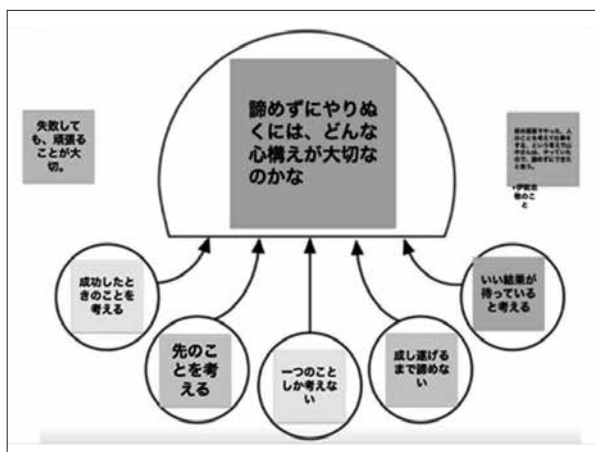


図8 「諦めずにやりぬくには、どんな心構えが大切なのか」について、グループでの話し合い

この授業では、振り返りの発問を「いろいろな人でできごととのかかわりで生き方は影響を受けますね。

今日の学習を自分の生活にどう生かしますか。」としている。児童の感想を以下に示す。

- 人に影響されて頑張ったり、好きになったりする。
- 人と関わっていくと、つらいことも楽しいこともあるから、これからもっと人と関わっていきたい。

このように、国語で考えた「生き方」というテーマを道徳科でも続けて扱ったことで強化できた。

5. 結果及び考察

3の提案事例、4の実践事例を通した結果をまとめ、考察する。

3の提案事例では、自分の考えの根拠になるものを、直接人に聞くことに加え、そこで足りないことや知りたいと思った情報をすぐにインターネットで調べられる「情報を集める場面」、4の授業実践では、「自分の考えを深める場面」や「考えを表現・共有する場面」で学習者用端末を効果的に使えた。

1のはじめにで示したように、「調べ学習がしやすくなったこと」「意見の交流・共有がスムーズにできるようになったこと」を活かして、学習者用端末を手立てとして活用する事例を示した。国語科の本質的な授業づくりにつながる要因として、

- 自分が使いたいときにすぐ使える環境であったこと
 - 4月から計画的にスキルを得ることで使い方や調べ方を知っていたこと
 - 可視化しやすいので自分の考えを整理しやすいこと
 - 瞬時に共有できること
- の4つが挙げられる。

ただし、学習者用端末だけでなく、ノートも適宜活用し、ノートに書く良さも大切にしていきたい。

6. おわりに

当紀要の今号の特集論文のテーマ(「魅力ある教職をめざして～教育の質向上と養成・研修～」)と本稿での授業事例を改めて振り返ると、「教育の質向上」として、「指導者のICT活用指導力」と「国語科としての本質を見据えた授業づくり」の両面が必要であることが示せたといえる。

国語科授業の質向上においては、国語科における授業改善に積極的に取り組む指導者の姿勢と、授業者が研修等で学んだ学習者用端末の使い方を児童に確実に指導し、双方のスキルアップを図ることができたことが重要であり、これらのベストミックスによって実践されたものが本事例であるといえる。

授業者は、和歌山市教育委員会が主催する放課後研修会や大学などの研修講座に積極的に参加し、自らのICT活用指導力を高めた。それとともに、情報主任と

協力して、使い方マニュアルなどの資料にも力を入れて準備し、全職員の意識とスキルを高める全体研修を行った。資料については、新しいものを作れば、手軽に手に取れる場所に置き、職員が活用しやすいようにした。一方で、授業者自身が校外の研修で学んだことを、校内で自ら実践して他の校内の教員に紹介したり、校内の教員からの希望に応じた内容のミニ研修を行ったりして、GIGA スクール推進の役割を担った。これによって、より意欲的に学習者用端末を活用していこうという自らの意識を高めたといえる。

本稿では、国語科授業の具体例を中心に挙げたが、当実践の背景として、このような授業者の各種研修での経験や校内での普及活動があることを把握できたことも大きな成果であった。「魅力ある教職」の諸要素としては、新たなニーズに対して学び続ける教員の自己研鑽ができる姿勢を尊重して、その研修体制や学

校全体で授業改善に取り組む体制が重要であることを再認識できたといえる。

参考文献

- 山本朋弘 (2020) 「1人1台情報端末時代の新たな学び」教室の窓 Vol. 63 東京書籍 p4-p5
- 『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』(答申) (2021) 中央教育審議会
- 水戸部修治 (2021) 「ICT & 1人1台端末を活用した言語活動パーフェクトガイド」、明治図書
- 文部科学省 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編
- 文部科学省 (2020) 「国語科の指導におけるICTの活用について」
- 文部科学省 (2021) 教育の情報化に関する手引(追補版)

